

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	教 敦 其 其 格
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>体育授業研究における教師教育者の「学び」に関する基礎的研究 —中国人留学生によるセルフスタディを通して—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 齊 藤 一 彦</p> <p>審査委員 教 授 七 木 田 敦</p> <p>審査委員 教 授 上 田 毅</p> <p>審査委員 准教授 岩 田 昌 太 郎</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国から日本へ来た教師教育者をめざす留学生 A を対象に、体育授業研究を通じた教師教育者としての「学び」の実態について検討したものである。具体的には、留学生 A によるセルフスタディを手がかりとして、体育授業研究の観察、参画、企画・運営を通じた教師教育者としての「学び」の実態について検討した。</p> <p>本論文は、第 1 章から第 5 章までの 5 つの章で構成されている。</p> <p>第 1 章では、研究の背景及び研究の目的と方法を述べた。具体的には、研究の背景や問題の所在として、教師教育者の専門的学習に関する先行研究の概観及び中国における教師教育改革の現状と課題、そして、日本の体育授業研究を中心に、授業研究と教師教育者の関係性に関する先行研究を概観することを通して、本論文の特質と意義を明らかにした。また、本論文を進めるにあたっての研究の方法や理論的枠組みを提示した。</p> <p>第 2 章では、小学校 A、中学校 B、小学校 C において、体育授業研究の実態の観察や視察を行った留学生 A を対象とした。そして、①留学生 A の体育授業研究の観察の際に記したフィールドノート、②留学生 A の体育授業研究の観察後に記した日記、③上記の①と②の記録をもとに、視察後に行った振り返りとしてのグループインタビュー、の 3 点について調査を実施した。その結果、本章では、留学生 A の日本の体育授業研究のシステムや体育授業作りの仕組みに関する「学び」と日本の授業研究を支える学校文化に関する「学び」が明らかとなった。</p> <p>第 3 章では、X 県の Y 小学校で実施された体育授業研究に指導助言者として参画した留学生 A を対象とした。そして、収集したデータは、体育授業研究の実施前のグループインタビュー（インタビュー1）と実施後のグループインタビュー（インタビュー2）で、得られたデータを複数名で帰納的に分析した。その結果、留学生 A の、授業研究の 4 つの段階（Study→Plan→Do→Reflect）における「学び」と 4 つの段階の間にある領域として新たな「学び」が見出された。また、留学生 A が指導助言の経験を有するベテラン教師教育者から学んでいたことと、他の教師教育者との協同的作業の重要性に気づいたことが明らかとなった。</p> <p>第 4 章では、中国・内モンゴルにおいて体育授業研究を企画・運営した留学生 A を対象とした。そして、留学生 A が企画・運営した体育授業研究に参加した体育教師 8 名へのインタビュー（調査 1）及び、その後に留学生 A とクリティカルフレンドとの 2 回のグループインタ</p>			

ビュー（調査2）を実施した。その結果、留学生 A は体育授業研究の現状に合った目標設定の重要性に気づいたこと、留学生 A 自身の教師教育者としてのアイデンティティが芽生えたこと、そして、自身の今後取り組むべき課題に気づいたことが明らかになった。

第 5 章では、総括としてこれまでの結果を踏まえて、留学生 A の体育授業研究の観察、参画、企画・運営を通じた教師教育者としての「学び」の実態について言及した。具体的には、

(1) 留学生 A の日本の体育授業研究のシステムや体育授業作りの仕組みに関する「学び」と日本の授業研究を支える学校文化に関する「学び」が明らかとなった。(2) 留学生 A の授業研究の 4 段階（Study→Plan→Do→Reflect）における「学び」と 4 段階の間の領域の「学び」が見出された。また、留学生 A が授業研究における指導助言の経験を有するベテラン教師教育者から学んでいたことと、他の教師教育者といった他者との協同的作業の重要性に気づいていたことが明らかとなった。(3) 留学生 A が体育授業研究を企画・運営することを通して、①現状に合った目標設定の重要性、②教師教育者としての自己アイデンティティの萌芽、③自身の今後取り組むべき課題への気づき、といった知見とその要因の 3 点が明らかとなった。

一方で、今後の課題として、(1) 留学生 A がどのような教育に関する価値観を持っているのか、そして、日本の体育授業研究を通して学んだことを自国での授業改善や授業研究を実践する際にいかに役に立っているのかといった追跡調査が必要であること、(2) 留学生 A の日本の体育授業研究を通じた教師教育者としての「学び」に関する研究をケーススタディとして蓄積していく必要があること、(3) 留学生 A の教師教育者としての「学び」について、教師教育者の視点のみからの考察となった。そのため、今後は、教師教育者の影響を受けた教師を対象に教師教育者の専門性開発を検討するなどして、多角的に教師教育者の「学び」を評価する必要性があること、が挙げられた。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 本論文は、正統的周辺参加論の枠組みを援用し、中国人留学生の体育授業研究の観察、参画、企画・運営を通じた教師教育者としての「学び」を縦断的に解明した点に特徴を有する。それに伴い、授業研究を基盤として教師教育者の専門性開発の一端を明らかにした斬新なアプローチといえる。
2. 本論文は、中国人留学生である筆者自身を研究対象とする「セルフスタディ (self-study)」を活用し、さらに、クリティカルフレンドとの共同的なアプローチという新しい研究方法論としての独自性を有する。
3. 本論文で明らかにした事例的な知見は、日本だけではなく、中国、さらにはアジアにおける教師教育改革、とりわけ教師教育者の専門的学習やその専門性開発の一資料として示唆に富む内容となっている。その点において、今後の授業研究や教師教育の研究分野を発展させる影響を持ち、有用性に富むことが評価に値する。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 4 年 6 月 29 日